

さすがに新たなる驚きを禁じ得なかった。故に、これが「イリュミナションを」に当る。そして、これに続く《Puis j'expliquai mes sophismes magiques avec l'hallucination des mots》が、「私は書きました」である。

さて、その《vaudeville》とは、《Pièce de théâtre où le dialogue est entremêlé de couplets faits sur des airs de vaudeville, ou empruntés à des opéras-comiques》(P. L.) のことである。この時、今一度大きな放電が起きた。即ち、*Saison* の彼一人の「対話」に、《couplets》、つまり「後期韻文詩」を挿入した *Délires II* そのものが、この《vaudeville》の形式を取っていたのである。初めに、「*Délires II* の全体がその自白に当る」と言ったのは、このことであった。それは実に、「後期韻文詩」と *Illuminations* が一体となって彼の《vaudeville》を形成することを、形で示していたのである。これは今までの最高の驚きであった。従って両者を合わせて、初めて本当の「イリュミナション」となるのである。ここに「イリュミナション」の秘密があった。そして、本論の *Parade* も、同じことを言っていたのであり、それは、この「ヴォードヴィル」の「客寄せ」だったのである。これは、以前に別の観点から、両者を同時期のものと考えたこととも一致した（「*Bateau ivre* 論」の37頁以下。以上の参照文献は、いずれも拙稿である）。

なお、他の様々な点から考えても、未発見の散文詩と言われる *Chasse spirituelle* とは、*Illuminations* の最初の題であったに違いない。それは、この「歴史ヤ宗教ガカツテ例ヲ見ナカッタマデ靈的ナ」存在の、その「狩人ノ歌」であった。《Un titre de vaudeville dressait des épouvantes devant moi》。これが、*Illuminations* の本当の「秘密」である。それは、*Saison en enfer* と *Livre nègre* の関係と等しく、後の命名なのであった。故に本論の初めに、*Délires II* の《je vécus, étincelle d'or de la lumière nature》から《Illuminations》となったことを述べたが、ランボオの比類なき命名法の種種相を見た今、これが正しく「いりゆみねえしょん」であることは、もはや明らかであろう。

De tes noirs Poèmes, —Jongleur !
Blancs, verts, et rouges dioptriques,
Que s'évadent d'étranges fleurs
Et des papillons électriques !

rasse》も、同じ《temple》の《terrasse》を表すのである。又、その屋根は《dôme》である所から、これを《chargées de dômes》(*Les Ponts*), 《sous le dôme de la Sainte-Chapelle》(*Villes*), 《Ce dôme est une armature d'acier artistique》(同上), 《parmi les clochers et les dômes》(*Aube*), 《un dôme d'émeraudes》(*Fleurs*) と言ったのであった。この《dôme》が、《une mosquée à la place d'une usine》である。次は《une école de tambours faite par des anges》であるが、《anges》は、既に述べた如く彼自身と見てよい。又、《tambours》は、《Un coup de ton doigt sur le tambour décharge tous les sons et commence la nouvelle harmonie》(*A une raison*), 《Des scènes lyriques accompagnées de flûte et de tambour》(*Scènes*), 《notre patois étouffe le tambour》(*Démocratie*) など。これは、同じくランボオ語である「戦」の《tambours》である。《école》はその軍事教練を指す。三番目の《des calèches sur les routes du ciel》は、*Enfance* に、《La calèche du cousin crie sur le sable》があった。そして、その前の《La jeune maman trépassée descend le peron》から、ここの《sur les routes du ciel》が明らかにされる。その他、*Ornières* の《des chars chargés d'animaux de bois doré》, 《vingt véhicules》, 《carrosses anciens ou de conte》や、*Nocturne vulgaire* の《Je suis descendu dans ce carrosse》, 《Corbillard de mon sommeil》, 《le véhicule vire》など、いずれも《hallucination》による「馬車」である。四番目の《un salon au fond d'un lac》は、*Soir historique* の《on joue aux cartes au fond de l'étang》のことであり、*Scènes* の《autour des salons de clubs modernes ou des salles de l'Orient ancien》と結びついている。最後の《les monstres, les mystères》は、それぞれ *Illuminations* の全篇がこれに当る。従って、以上が *Illuminations* を指すことは余りにも明白なことであり、逆に外の何を指すかを考えても、答は一つしかないのである。

ところで、彼は更に、《un titre de vaudeville dressait des épouvantes》なる一文を付け加えた。これは何であろうか。そこに何か重大なことが隠されていることは直観で分った。先の「*Parade* 解釈」の時も、ランボオにおいては、演劇用語が極めて重要な意味を持つことを見たのである。そして、何日も考え続けた末、遂に放電は起ったのであった。実に、この《un titre de vaudeville》こそが、*Illuminations* そのものだったのである。これはまた、何とランボオ的な命名法であろうか。彼の語り口には慣れたとは言え、これには、

ばならなくなった。

かねてラコスト説の非を唱え、様々な理由を挙げてきたが、要は彼ランボオを信ずるか否かの問題なのである。それは、「証拠」を見る前になさねばならぬことであった。従って、これを主張する時は、自己の存在が賭けられる。即ち、もし誤った時には二度とその名を口にすまいと思つての発言であったが、その時のランボオとは、もはや理解能わざる無用のものであるに違いない。また、その彼を信じた者も。それは、要するに一度限りのことなのである。本当に信ずるのは、疑うことよりもはるかに難しい。幸いにも、ランボオは世界で唯一人、完全に信ずることが出来た。

そして、彼を信ずる限り、反ラコスト説の理由は無数にあり、その反対の理由の一つも見つからなかったのである。逆に言えば、これが「真実」なのであるから、それは当然のことであった。確かに、先の「解釈 I」で述べた如く、ランボオが *Saison* の後に *Illuminations* の出版を意図して、これを清書したことは恐らく事実であろう。しかしながら、外的証拠だけに頼って、内容の理解を全く抜きにしたことは、根本的な過ちであったと言わねばならない。外に最後の証拠を求める者は、証拠によって亡ぶのである。本当の証拠は、内にあるが故に。

ところが、誠に驚くべきことは、その挙句に決定的な「証拠」が得られたことである。それも、いわゆる情況証拠ではなく、本人の「自白」を。即ち、*Saison* の中に、「私は *Illuminations* を書きました」という言葉をである。結論から先に言えば、広い意味では *Délires II* の全体がその自白に当る。さりながら、これが納得されぬ為「問題」が起きたのであった。そこで具体的に言えば、彼が疑問の余地がないまでに明瞭に語っているのは次の個所である。《Je m'habituai à l'hallucination simple: je voyais très franchement une mosquée à la place d'une usine, une école de tambours faite par des anges, des calèches sur les routes du ciel, un salon au fond d'un lac; les monstres, les mystères; un titre de vaudeville dressait des épouvantes devant moi》。以下に、これが *Illuminations* のどの個所を指しているかを説明しよう。先ず、《mosquée》の辞書の意味は、《Temple des mahométans》(P.L.)である。しかしながら、《mahométans》は、《Je n'avais pas en vue la sagesse bâtarde du Coran》(*L'Impossible*)と述べているが如く、彼言う所の《l'Orient》が問題なのであった。その意味の、《O les énormes avenues du pays saint, les terrasses du temple!》(*Vies I*)であり、*Enfance* の《Je suis le saint, en prière sur la ter-

la même nuit, toujours mes yeux las se réveillent à l'étoile d'argent, toujours, sans que s'émeuvent les Rois de la vie, les trois mages, le cœur, l'âme, l'esprit. Quand irons-nous, par delà les grèves et les monts, saluer la naissance du travail nouveau, la sagesse nouvelle, la fuite des tyrans et des démons, la fin de la superstition, adorer—les premiers—Noël sur la terre!》(Matin)。「夜空の星」については繰り返し述べたが、その最後の意味はここにある。よもやこの「三人」となった《nous》、即ち《le cœur, l'âme, l'esprit》がランボオとヴェルレーヌを指すと言う者はいないであろう。何となれば、それは二人でないどころか、同時に《mes yeux》の如く、「一人」でもあるからである。

以上で説明は十分になされたと思うが、肝心の *Délires I* には触れなかった。それは、この一章が何にも増して明らかに示しているからに外ならない。もし、「二人ランボオ」が十分理解されたならば、そこには一点の疑念をさし挟む余地もない筈である。その一例だけを挙げよう。それは次の個所である。《Une femme s'est dévouée à aimer ce méchant idiot: elle est morte, c'est certes une sainte au ciel, à présent. Tu me feras mourir comme il a fait mourir cette femme》。「彼ランボオが殺した、このもう一人のヴェルレーヌ」とは、一体何のことであろうか。「ヴェルレーヌを殺そうとするランボオ」とは、一体何のことであろうか。逆ではなかったのか。これに答えることは絶対に出来ない筈である。何故ならば、語り手は《Vierge folle》であり、彼女の語る「死んだ」《femme》も、同じ《Vierge folle》に外ならないからである。即ち、その《Vierge folle》とは、ランボオが《je suis un autre》の覚醒によって「絞首刑」にした、過去の自分のことであった。そして、以後の《Vierge folle》は、正しく《Epoux infernal》の伴侶だったのである。故に、彼の「オフェリア」も死んだのであった。そこには、ヴェルレーヌは影さえも落していない。

では、何故このような「誤解」が生じたのか。その一因は、ランボオとヴェルレーヌがそのようなポーズを取った為である。では、何故そのようなポーズを取ったのか。それは、人がそのような目で二人を見た為であった。

5. 「イリュミネーション」の秘密

そろそろ、ラコスト説との決着をつけねばならない。本来これは「*Illuminations* 解釈」の最後におくべきものであるが、何故か今のうちに書いておかね

彼等二人ノ頬笑ミヨ。満タサン
空ヲ銅ノ冠百千ヲ以テ。
次イデ二人ハ意地悪鼠ニ係ワラン。

《La nuit》が、彼の《l'amie》であることは説明を要すまい。《bandeaux de cuivre》は、*Sœurs de charité* の《Et qu'eût, le front cerclé de cuivre, sous la lune / Adoré, dans la Perse, un Génie inconnu》と同じであり、ここでは、「二人の笑顔」で作った「王冠」を表す。また《rat》は、《Un rat se dit populairement et injurieusement pour désigner celui qui craint de faire la moindre dépense》(*Littre*) の意から、家賃を取り立てる家主（恐らくは老婆）のことである。故に、これを《malin》と呼んだのであった。

—S'il n'arrive pas un feu follet blême,
Comme un coup de fusil, après des vêpres.
—O spectres saints et blancs de Bethléem,
Charmez plutôt le bleu de leur fenêtre !

—晩課ノ後銃撃ノ如、
青ザメシ鬼火ノ現レマセヌ様。
—噫べつれへむノ聖ナル白キ亡靈ヨ、
寧ロ二人ノ青キ窓辺ヲ魂了セヨ。

ここは前節に続く。《feu follet blême》は、家主の老婆が手にするローソクの明りである。彼女の《vêpres》後の不意の訪れは、正に《Un coup de fusil》であった。なお、ここは、《prendre un rat》や、《rat de cave》と掛けてある。さて、最後の二行は少し難しい。彼は既に述べた如く、自身を《ange ou mage》と呼んだ。《mage》は、先の *Sœurs de charité* と関連した《Prêtre de la religion des anciens Perses》(*P.L.*) の意であり、更に《les mages》は、《les trois personnages qui vinrent de l'Orient à Bethléem pour adorer Jésus-Christ》(同上) である。従って、この《spectres saints et blancs de Bethléem》は、彼等三人を導いた「星」に擬えた表現であり、先の《marraines》のことであった。彼を導く「星」については、*Saison* に次の取り分けて美しい一節がある。《Du même désert, à

次イテ其扱ニ居坐ルトハ。夫婦二人ハ
凡ソ不真面目。不在ニシテ何事モ起ラズ。

ここの《marraines》は、二人を生れた時から知っている「夜空の星」のこと。そして、上に物を置いた《des coffrets et des huches》を、招待の《buffets》に見立てたのである。従って、それは人気のない乱雑な部室を、星明りが照している様となる。

Le marié a le vent qui le floue
Pendant son absence, ici, tout le temps.
Même des esprits des eaux, malfaisants
Entrent vaguer aux sphères de l'alcôve.

此扱ハ順風ガ花婿ニ帆ヲ上ゲサセテ、
ソノ風ガ留守居ノ花嫁ヲ絶ヘズ取ル。
水ノ精共マデガ害ヲ為シ、
寢所ヘトサ迷イ込ム。

《a le vent》は、《avoir le vent en poupe》の意。勿論、《Epoux infernal》の「仕事」が渉ることであり、その為の《pendant son absence》が、《Vierge folle》の《veuvages》となったのであった。これを「空気の精 Sylphe」の騙りと言ったのである。なお、*Ophélie* に、《C'est que les vents tombant des grands monts de Norwège / T'avaient parlé tout bas de l'âpre liberté》や、《C'est qu'un souffe, tordant ta grande chevelure, / A ton esprit rêveur portait d'étranges bruits》がある。次の《esprits des eaux》は、「水の精 nymphes」のことであり、従って、それは「夏の虫」を指す。これが《malfaisants》となる所以である。

La nuit, l'amie oh ! la lune de miel
Cueillera leur sourire et remplira
De mille bandeaux de cuivre le ciel.
Puis ils auront affaire au malin rat.

夜（噫親シキ友ヨ）、蜜月ハ摘マン

第一節は、自分の部室と外を一見した時の様であり、《bleu-turquin》は、「夏の夜空」を表す。《Maintenant, c'est la nuit que je travaille. De minuit à cinq heures du matin》(Lettre à Ernest Delahaye)。従って、夜中に仕事を始める為に帰ってきた所である。また部室は、引越しの荷物をそのまま放置してあった為に、《Pas de place》であった。窓から外を見ると、向いの壁に「馬の鈴草」が一面に生えて、夜風に揺れていた。この植物は夏に咲き、暗紫色のラッパ状の花をつける。故に、《les gencives des lutins》となったのである(ラッパが口を表すことは、先に述べた)。なお、和名に「御歯黒花」の別称がある。

Que ce sont bien intrigues de génies
Cette dépense et ces désordres vains !
C'est la fée africaine qui fournit
La mûre, et les résilles dans les coins.

コレゾ正シク魔ノ陰謀,
コノ浪費, コノ虚シキ乱脈ハ。
正ニあふりか妖精ノ調達ゾ,
コノ桑ノ実ト四隅ノへや・ねっとトハ。

《génies》は《lutins》から導かれ、以下その生活の乱脈ぶりを、これら共の仕業と語る。問題は後の二行であるが、その場の情景を想像するならば、自と明らかになる。即ち、《mûre》は壁や天井の「煤」であり、《résilles dans les coins》は、「部室の隅に張られた蜘蛛の巣」である。その黒ずんだ色故に、また前節の《gencives des lutins》故に、《fée africaine》となったのである。要するに、ここも《noir》が問題なのであった。

Plusieurs entrent, marraines mécontentes,
En pans de lumière dans les buffets,
Puis y restent ! le ménage s'absente
Peu sérieusement, et rien ne se fait.

光ノ裾デてえぶるニ入ル
不服顔ノ名付ケ親ガ数人,

Tes grandes visions étranglaient ta parole
—Et l'Infini terrible effara ton œil bleu !

ここの《un beau cavalier》(《Un pauvre fou》)とは、次の《Ciel !
Amour ! Liberté !》を指す。「詩人」はこれを《Quel rêve》と言って、
《pauvre Folle》に呼びかけたのであった。従って、次の《lui》は《rêve》
であり、この《un beau cavalier》が、後の「使命を帯びたランボオ」、即ち
《Epoux infernal》なのである。そして、ここの《l'Infini》が、*Lettre
du voyant* の《l'inconnu》となった。また、彼が《Vierge folle》から
《Epoux infernal》に変身したことを示すもの、それが同じ *Lettre du voy-
ant* の、かの有名な《Je suis un autre》なのである。これが「二人ランボ
オ」の本当の意味である。そして、後にこの「二人」を「夫婦」と呼び、*Jeune
Ménage* が作られたのであった。以上は余りにも明白なことであるが、頑強な
同性愛説に対しては、この謎にみちた作品の完全な解釈を試みなければならぬ
であろう。しかしながら、そもそも内容が少しも理解されぬまま、この「若夫
婦」をヴェルレーヌ夫妻ないしランボオ・ヴェルレーヌと断定するとは、何と
不可解なことであろうか。この作品は、そのような観点からの解釈を一切拒否
するのである。

さて、*Jeune ménage* に限っては、少し情況の説明が必要であろう。そこには、
1872年6月27日と、明確な日付けが記されている。その年の五月再度パリ
に上った彼は、《rue Monsieur-le-Prince》、次いで《rue Victor-Cousin》
に居を定めた。この頃が最も規則的に仕事をした時期であった。そして、五月
と六月の日付けが示す如く、一連の「後期韻文詩」が作られた後、ようやく自
分の身の回りに眼をやった時に、この作品が作られたのである。

La chambre est ouverte au ciel bleu-turquin;
Pas de place: des coffrets et des huches !
Dehors le mur est plein d'aristoloches
Où vibrent les gencives des lutins.

とるこ・ぶるうノ空ニ開ケ放タレシ部屋。
小箱ト長持デ、坐ル所ナシ。
外ハ、壁一面ニうまのすずくさ生ヘテ、
妖精ノ齒莖ガ震フ。

しかしながら、この《à l'instar des comprachicos》が自身の切り離せない本体に向けられた時は、もはや単なる《difformités》では済まされなかった。即ち、これが彼言う所の「おかしな夫婦」(《Drôle de ménage》)であり、一方を《Vierge folle》と呼び、他方を《Epoux infernal》と言ったのである。そして、「使命」の為に、この一人の二人が「分断」された時、それは「やもめ暮し」となったのであった。《Ah! Mille veuves / De la si pauvre âme》(*Chanson de la plus haute tour*)。

とは言え、「狂気の処女・ヴェルレーヌ説」は今だ根強いどころか、それは殆ど抜き差しならぬ固定観念とまでなっている。そこで予定を変更し、前稿に続いて、今一度これに触れねばならない。先ず第一に、ランボオの用語は正確を極め、そこには一点の曖昧さもないこと。第二に、彼にとって、ヴェルレーヌは殆ど意味を持たぬ存在であったこと。それは、特に他のすべての個人について言えることで、使命の為に女を断念した彼は、特定の対象に強い愛着を持つようなことは決してなかったのである。二人の共同生活の間も、彼自身は異常な孤独の中にあつたのであった。ただ *Vagabonds* に見る如く、他人を容れぬ彼一人の世界に、ヴェルレーヌは一度だけ姿を現す。その *Vagabonds* で、彼ヴェルレーヌは如何に扱われているか。それは《Pitoyable frère!》に始まる。正しく《frère》なのである。更に《ce satanique docteur》と言い、《le pauvre frère》と呼ぶ。そして全篇にあるのは、揶揄と憐憫の混淆であり、後は彼の孤独な姿ばかりである。それは、*Délires I* や *Adieu* が示す如く、理想の夫婦像を求めたランボオの「伴侶」とは、凡そかけ離れたものであった。一方、彼が「夫婦」と呼んだのは、「地獄の夫」と「狂気の処女」の二人である。彼が《Vierge folle》と言う時、それは文字通り《Vierge》であり、《folle》であった。これが「男」または「女」を指すことなどは、絶対がないのである。では、この《Vierge folle》とは一体何か。それが、「初期韻文詩」四作目の *Ophélie* であった。勿論、それは「ハムレット」の「オフィーリア」ではなく、*Rimbaud Ophélie* と呼ばねばならないものである。

C'est qu'un matin d'avril, un beau cavalier pâle,
Un pauvre fou, s'assit muet à tes genoux!

Ciel! Amour! Liberté! Quel rêve, ô pauvre Folle!
Tu te fondais à lui comme une neige au feu:

その完き意味において理解されたのである。

ここで全体を見直してみると、「彼等」を自在に操るランボオの姿が見えてくる。これは明らかに、ヴィヨンの *Ballade des pendus* に触発された *Bal des Pendus* の延長である（この作品も演劇用語が多い）。そして、自分が彼等「絞首罪人」を操る《Messire Belzébuth》になった図が、先に述べた *Mes petites amoureuses* であった。その《Entrechoquez vos genouillères, / Mes laideron!》や、《Hop donc! soyez-moi ballerines / Pour un moment!》などの奇怪な表現は、ここに起因する。彼は自分の各時期の詩を《mes laiderons》と呼び、これらを「絞首刑」にしたのであった。この作品は、例の *Lettre du voyant* に挿入されたが、その直後の同じ Demeny に宛てた手紙で、以前に渡した約二十篇の「初期韻文詩」を、全部焼却する様懇願したのである。ここから *Parade* への発展は、もはや明らかに見て取れよう。

ところで、彼の「二人の形式」による自己表現は、前稿で見た通りであるが、*Mes petites amoureuses* は、過去の自分を四つに分けている。この驚くべき「自己分断法」は一体何であるのだろうか。これを解く手掛かりとなったのが、*Lettre du voyant* の《il s'agit de faire l'âme monstrueuse: à l'instar des comprachicos, quoi!》であった。《comprachicos》は、《allusion évidente à l'Homme qui rit de Hugo: le mot s'applique chez Hugo à des voleurs d'enfants qui mutilaient leurs victimes pour en faire des monstres et pouvoir gagner de l'argent à les exhiber》(Garnier 版注釈より)。この《à l'instar des comprachicos》の手始めが、*Mes petites amoureuses* であったのである。*Enfance* が自身を四つに分けて、《Je suis le saint, en prière sur la terrasse》、《Je suis le savant au fauteuil sombre》、《Je suis le piéton de la grand'route par les bois nains》、《Je serais bien l'enfant abandonné sur la jetée partie à la haute mer》とするのも、やはりこれに基く。それは、*Parade* の「支那人」以下の列举と同じであり、主語が複数であることの本当の根拠は、実はここにあったのである。従って、《difformités》も、彼《comprachicos》によって作られた自分の《l'âme monstrueuse》を指し、また「子供」の手足を切るが故に、己を《Molochs》と呼んだのである。そして、これを「恥じて」、*Honte* が作られた。即ち、《Ah! Lui, devrait couper son / Nez, sa lèvre, ses oreilles, / Son ventre! et faire abandon / De ses jambes! ô merveille!》となったのであった。これを語ったのが、《Un homme qui veut se mutiler est bien damné, n'est-ce pas?》(*Nuit de l'enfer*) である。

である。この《poison》とは、*Matinée d'ivresse* が示す如く、彼言う所の「陶醉」であり、彼等は今、その「昼間興行」を演じているのである。それは、《O mon Bien! O mon Beau! Fanfare atroce où je ne trébuche point! Chevalet féérique!》で始まる。故に彼の「陶醉」とは、「地獄の苦しみ」であり、「木馬の刑」であった。それを歌って踊っているが、*Parade* のこの部分である。従って《les os s'élargissent》も、先の《Ouvrant lentement leurs omoplates, ô rage!》(*Les Assis*) が示す如く、「怒りの陶醉」を表す。また *Voyelles* も、《rire des lèvres belles / Dans la colère ou les ivresses pénitentes》であった。最後の《filets rouges》は、*Chanson de Roland* に基く。「ろおらん、息ノ限りおりふあんヲ吹ク。口ヨリ鮮血ホトバシリ、コメカミ破レル。」これを語ったのが、《Sur les plates-formes au milieu des gouffres les Rolands sonnent leur braboure》(*Villes*) である。そして、これが *Barbare* の、《Le Pavillon en viande saignante》なのである。それは、《sang craché》(*Voyelles*) に始まった。

Leur raillerie ou leur terreur dure une minute, ou des mois entiers.

彼等ノ冗談ナイシ恐ロシキ様ハ、一分間、或イハ何ケ月間ト続ク。

《raillerie》は、*Saison* の《S'il m'expliquait ses tristesses, les comprendrais-je plus que ses railleries》(*Délires I*) から明らかにされる。また《terreur》は、《qui est propre à exciter la terreur》が《tragédie》の定義であった。そして、激しい《ivresse》のことであるが故に、その時間は「一分間」であり、その絶えざる《ivresse》は、「何ケ月」も続くのである。

以上に見た如く、この *Parade* はすべて、ランボオの一人舞台であった。故に、

J'ai seul la clef de cette parade sauvage.

コノ野蛮ナ客寄セ道化ノ鍵ハ、我一人ガ握ル。

当初 *Parade* を解く「鍵」であったこの一行は、今や格段の重みを持って、

ち、これらすべてが《bonnes filles》であったのである。何とまたこれは驚嘆すべき表現なのであろうか。正しく、ランボオ的命名法の神髓と言えよう。従って、先の《tragédies》と《pièces nouvelles》は、*Illuminations* そのものを指し、《complaintes》と《chansons》は、「後期韻文詩」を指す。

Mâîtres jongleurs, ils transforment le lieu et les personnes et usent de la comédie magnétique.

彼等ハ吟遊詩人ノ頭。場所ト登場人物ヲ変形サセテ、催眠的ナ喜劇ヲ行使スル。

《jongleurs》は、既に *Ce qu'on dit au poète à propos de fleurs* において、《De tes noirs Poèmes, —Jongleur!》と呼びかけているのを見た。従って、《Mâîtres jongleurs》は、やはり《voyant》達となる。次の《ils transforment le lieu et les personnes》についても、《déplacements de races et de continents》や、《les habitations et les migrations》などを見た。即ちここから、先の《Chinois》以下の列挙となったのである。《la comédie》は、勿論《La Comédie de la soif》などと同等の使われ方である。そして《magnétique》も、先の《moi, qui me suis dit mage ou ange》や、《Fakirs》との比較からして明らかであろう。また、その「眼」は《d'acier》であった。故に、本義の「磁力を帯びた」喜劇となる。《d'acier》の本当の意味は、ここにあったのである。

Les yeux flambent, le sang chante, les os s'élargissent, les larmes et des filets rouges ruissellent.

眼ハ燃エ、血ハ歌イ、骨ハ広ガリ、涙ト赤イ細筋ガ輝ク。

この部分は、同じく *Saison* が明らかにする。即ち、*Nuit de l'enfer* 冒頭の、《J'ai avalé une fameuse gorgée de poison. Trois fois béni soit le conseil qui m'est arrivé! —Les entrailles me brûlent. La violence du venin tord mes membres, me rend difforme, me terrasse. Je meurs de soif, j'étouffe, je ne puis crier. C'est l'enfer, l'éternelle peine! Voyez comme le feu se relève! Je brûle comme il faut. Va, démon!》

解説なのである。即ち先に、最後の一行に鍵があることを述べたが、*Saison*はランボオ全体の、その最後の一行に当る。

Ils interpréteraient des pièces nouvelles et des chansons «bonnes filles».

彼等ハ新シイ脚本ト、「良キ娘達」ノ歌ヲ、歌イ演ズルデアロウ。

《nouvelles》の形容は、*Illuminations*に多いが、これを語ったのが、*Saison*の《J'ai essayé d'inventer de nouvelles fleurs, de nouveaux astres, de nouvelles chairs, de nonvelles langues》(*Adieu*)である。《chansons》が《romances》であることは先に述べた。しかしながら、この括弧入りの《bonnes filles》は、一体何であろうか。これは用心してかからねばならない。ランボオが、普通の娘を持ち出す筈はないからである。既に*Enfance*の解釈で、「花」を女性の姿で表しているのを見た。そこで思い出したのが、自分の各時期の詩想を「女の子」として、それぞれを色で表した *Mes petites amoureuses* である（「*Voyelles* 論」の101頁以下を参照）。ここで、今一度 *Illuminations* を見直してみよう。すると、*Soir historique* に、《miroir évocateur des reines et des mignonnes》とある。これは明らかに、現実の《reines》や《mignonnes》ではない。更に *Phrases* の、《tourné du côté de l'ombre, je vous vois, mes filles ! mes reines !》がある。先ず、どちらにも共通して現われる《reines》は何か。ここで、*Après le déluge* の《la Reine, la sorcière qui allume sa braise dans le pot de terre, ne voudra jamais nous raconter ce qu'elle sait, et que nous ignorons》が思い出されたが、この《Reine》は《tristesses》であった（「解釈I」の46頁）。これと、*Saison* 冒頭の《O sorcières, ô misère, ô haine, c'est à vous que mon trésor a été confié !》を考え合わせるならば、もはや《reines》の意味は明らかである。さて、今度は《filles》を、もう少しはっきりさせねばならない。特異な「対話」形式をとる *Comédie de la soif* の《Moi》の部分に、《Chansonnier, ta filleule / C'est ma soif si folle / Hydre intime sans gueules / Qui mine et désole》があるが、この《Chansonnier》は題の《L'Esprit》である。すると、この歌唱の「名付け子」は、一連の《chansons》のテーマである《faim》や、《patience》にも共通するに違いない。言うまでもなく、《reines》と同様そのいずれもが女性名詞である。即

《noir》であることは、勿論言うまでもない。そして、彼自身と同じこの「沙漠」(《désert》は重要なランボオ語)の遊牧の民から、次の《bohémiens》となる。これもまた、《Et j'irai loin, bien loin, comme un bohémien》(*Sensation*)の如く自身を指す為に、この《Vagabond》は、《niais》(《Qui est simple et encore sans usage du monde》, *P. L.*)であったのである。そして《hyènes》は、《Femme (ou plus rarement homme), d'un naturel féroce et vil》(*Robert*)であり、*Saison*の冒頭でも、自分を指して《Tu resteras hyène》と言う。そこから次の《Moloch》へ移るのは、自分自身に対して、子供の生贄に等しいものを要求した為であった。子供は正しく、人間の「希望」そのものである。故に、同じ *Saison* の冒頭で、《Je parvins à faire s'évanouir dans mon esprit toute l'espérance humaine. Sur toute joie pour l'étrangler j'ai fait le bond sourd de la bête féroce》と語ったのである。正に《hyène》と言えよう (*Grand Larousse* は、《Personne qui s'attaque aux gens sans défense ou déjà abattus》と定義する)。そして、これを《vieilles démenes》とも、《démons sinistres》とも呼んだのである。彼自身が《démon》であることは、*Délires I* で繰り返し言われることであり、改めて述べるには及ぶまい。さて、ここで今一度、以上を「音」として見直さねばならない。即ち、《nois》から《Hotten》、《tots》から《bo》、《hémiens》から《niais》、《niais》から《hyènes》となり、《démences》から《démons si》となるのである。その「民族」の多様性は、*Solde* において《A vendre les habitations et les migrations》と言い、また *Délires II* において、《Je rêvais . . . , déplacements de races et de continents》と述べているが如くである。*Enfance* の冒頭も、《Cette idole, . . . , mexicaine et flamande》であった(その意味については、前記の「*Bateau ivre* 論」参照のこと)。また《tours populaires, maternels》は、*Agès d'or* の《Reconnais ce tour / Si gai, si facile》と同じであり(ここの《gai》もまた、先の《enrouement》と結びつくが)、それを彼は《patois》とも言う。《notre patois étouffe le tambour》(*Démocratie*)、《Parfois il parle, en une façon de patois attendri》(*Délires I*)など。この《attendri》が、次の《tendresses bestiales》と結びつくのであるが、これについても同じ *Délires I* の中で、《il riait affreusement, longtemps. —Puis, il reprenait ses manières de jeune mère, de sœur aimée. S'il était moins sauvage, nous serions sauvés! Mais sa douceur aussi est mortelle》と説明する。要するに *Saison* は、その全体が *Illuminations* の

l'ardeur des pillards》(L'Impossible) とも、《Mes derniers regrets détalent, —des jalousies pour les mendiants, les brigands, les amis de la mort, les arriérés de toutes sortes》(Adieu) とも言う。又、*Illuminations* には *Vagabond* なる一編があった。そして、この《malandrins》が、先に述べた *Bal des Pendus* と結びつくのである。《demi-dieux》は、言うまでもなく《toute la force surhumaine》を持つ《voyant》であり、*Enfance* の冒頭は、《Cette idole, yeux noirs et crin jaune, sans parents ni cour, plus noble que la fable》であった。この《voyant》と「追剣」の結びつきは先にみた。また、それは《complaintes》や《tragédies》の定義からも明らかであろう。しかしながら、かくも繰り返し述べられた盗賊への同化は、やはり異様と言わねばならない。その本当の理由はどこにあったのであろうか。これは隠されてはいるが、そこにはヴィヨンに対する深い共鳴があったのである。さて、《mauvais rêve》については、《Extase, cauchemar, sommeil dans un nid de flamme》(*Nuit de l'enfer*) がある。そして《rêve》は、《Rêve intense et rapide de groupes sentimentaux avec des êtres de tous les caractères parmi toutes les apparences》の例を見た。従って、「魔術師」ランボオ振り付け故の、《costumes improvisés avec le goût du mauvais rêve》である。

Chinois, Hottentots, bohémiens, niais, hyènes, Molochs, vieilles démentes, démons sinistres, ils mêlent les tours populaires, maternels, avec les poses et les tendresses bestiales.

彼等ハ支那人ニシテ、ほってんとつと、じぶしい、未熟者、はいえな、もろくノ神、時代遅レノ痴呆、陰険ナ悪魔。ソノ獣ジミタ身振リト優シサニ、母国ノ卑俗ナ言イ回シヲ混ゼル。

これはまた、何と奇怪千万な表現であろうか。しかしながら、先の「ランボオ色彩学」と同様、やはりそこには「ランボオ言語学」とも言うべきものが存在したのである。では以下に、ここの列挙の意味を説明しよう。何故《chinois》かは、《se dit, en moquerie, de quelqu'un qui par sa tournure de corps ou de l'esprit a quelque chose de burlesque et de désagréable》(P. L.) の為である。そこから次の《Hottentots》が導き出される。と言うのは、これはオランダ語であり、《bégayeur》を意味するからである。また、その色が

pour exciter le rire》(P.L.) の意であり、*Délires I* は続けて、《il riait affreusement, longtemps》と言う。そして自身についても、《De joie, je prenais une expression bouffonne et égarée au possible》(*Délires II*) と語り、あの *L'Eternité* を挙げていることを忘れてはならない。

Dans des costumes improvisés avec le goût du mauvais rêve ils jouent des complaintes, des tragédies de malandrins et de demi-dieux spirituels comme l'histoire ou les religions ne l'ont jamais été.

思イ付キノ、悪夢ノ味ノ衣裳ヲ纏イ、彼等ガ演ズルハ、追剝ト半神共ノ哀歌ト悲劇。歴史ヤ宗教ガカツテ例ヲ見ナカッタマデ靈的ナ追剝ト半神共ヲ歌ウ。

彼は同じ *Délires II* において、《J'aimais.....; la littérature démodée, latin d'église, livres érotiques sans orthographe, romans de nos aïeules, contes de fées, petits livres de l'enfance, opéras vieux, refrains niais, rythmes naïfs》と打ち明けた。そして一部の「後期韻文詩」を挙げた後に、《La vieillerie poétique avait une bonne part dans mon alchimie du verbe》と語る。また《je disais adieu au monde dans d'espèces de romances》と言って、あの *Chanson de la plus haute tour* が挙げられた。その《romances》は、《Ancienne histoire, écrite en vers simples et naïfs, dont le fond est touchant et la forme appropriée au chant》(P.L.) であり、この《complaintes》の意味も、《Chanson populaire sur quelque événement tragique ou sur une légende de dévotion》(同上) である。そして、次の《tragédies》も、その意味は言うまでもなく、《Pièce de théâtre en vers dans laquelle figurent des personnages illustres, qui est propre à exciter la terreur et la pitié, et qui se termine ordinairement par un événement funeste》(同上) である。従って、この《complaintes》と《tragédies》が、後出の《des pièces nouvelles》と《des chansons》に係わることは間違いない。結論は、まだ控えておこう。次の《malandrins》は、《Nom donné à des pillards qui, au quatorzième siècle, infestaient la France. Par extens. Brigand, vagabond》(P.L.) であり、後にこれを語って、《J'envoyais au diable les palmes des martyres, les rayons de l'art, l'orgueil des inventeurs,

Saison の *Nuit de l'enfer* でも、まだ、《Bah! faisons toutes les grimaces imaginables》と叫ぶのである。彼の《voyant》の定義は《le grand malade, le grand criminel, le grand maudit》であった。従って、《Pendus》と《voyant》が、共に苦痛に堪えた「澁面」を見せても不思議はないのである。《enragée》は、《rage》の例を見よう。《Ouvrant lentement leurs omoplates, ô rage!》 (*Les Assis*) や、*Illuminations* の《Il est l'affection et l'avenir, la force et l'amour que nous, debout dans les rages et les ennuis, nous voyons passer dans le ciel de tempête et les drapeaux d'extase》 (*Génie*), *Saison* の《Les rages, les débauches, la folie, dont je sais tous les élans et les désastres, — tout mon fardeau est déposé》 (*Mauvais sang*), 《Je veux devenir bien fou de rage》 (*Délires I* の回想部分) など。《rage》の辞書の意味は、「狂犬病(恐水病)」、「激痛」、「激怒」である。では何故、ランボオは「狂犬病」なのか。それは *Larme* が示す如く、彼は「飲めなかった」からである。その「激痛」であり、「激怒」であった。その挙句に、*Comédie de la soif* となり、*Fête de la faim* となったのである (*P.L.* に《La rage de la faim》の例あり)。そして、これらの苦痛に耐えた末が、*Fête de la patience* となったのであった。なお *Vies II* に、《j'attends de devenir un très méchant fou》とあり、*Délires I* に、《Une femme s'est dévouée à aimer ce méchant idiot》とあるのも、《un fort méchant homme》を、《un chien enragé》と呼ぶ為である (*P.L.*)。《voyant》とは、かくまでの苦行を要したのであった。

Pas de comparaison avec vos Fakirs et les autres bouffonneries scéniques.

アナタ方ノ『行者』ヤ、他ノ道化芝居トハ比較ニナラヌ。

《Fakir》は一般に、《personne qui donne un spectacle d'exercices (voyance, prestidigitation, hypnose, tours imités de ceux des fakirs)》 (*Petit Robert*) のこと。ここでも、《voyant》との対比は明らかであろう。従って、《autres bouffonneries scéniques》は、世間一般の、芝居ではない「芝居」を指す。これを言ったのが、*Délire I* の《il avait des jours où tous les hommes agissant lui paraissaient les jouets de délires grotesques》である。《bouffonneries》は勿論、《Ce qu'on dit ou ce qu'on fait

《Affubler》は、《Habiller d'une manière irrégulière, bizarre, ridicule》(P. L.)。《luxé》は幾つか例があるが、例えば《Qu'il n'y ait ici-bas qu'un vieillard seul, calme et beau, entouré d'un 《luxé inouï》》(Phrases) の如くに使われる。この括弧とイタリックは共通するであろう。従って、それは《voyant》の精神の《luxé》を表す。《Puisqu'il a cultivé son âme, déjà riche, plus qu'aucun!》(Lettre du voyant)。次の《dégoûtant》は、言うまでもなく先の《cruelle》と同等である。前半の《prendre du dos》はかなり難しいが、*A la musique* の《Je suis, sous le corsage et les frêles atours, / Le dos divin après la courbe des épaules》に基づいた表現と見てよい。《On les envoie》は、勿論《voyant》の修業の為である。今一度、その手紙を見てみよう。《Maintenant, je m'encra-pule le plus possible. Pourquoi? Je veux être poète, et je travaille à me rendre voyant》。そして例の *Forgeron* も、仲間を《C'est la Crapule》と呼んでいた。彼の「放蕩」とは、要するに耐えに耐えた神童から変身する為の方法論だったのである。従って、それは彼の「陶醉」を表した。また同じ *A la musique* に、《Elles me trouvent drôle》とある如く、ここは最初の《Des drôles》とも撃がってくるのである。故に、《On》はランボオであり、《les》もまたランボオである。しかしながら、*Saison* の《Mais l'orgie et la camaraderie des femmes m'étaient interdites》(Mauvais sang) を忘れてはならない。彼は使命達成の為に、「女」を断念したのであった(*Les Sœurs de charité* 参照)。なお、ここの《prendre du dos》が、後出の《malandrins》と結びつく。これが彼一流の名付け方なのである。

O le plus violent Paradis de la grimace enragée!

噫、激怒セル洪面ノ最モ烈シキ『天国』ヨ。

同じ「天国」の使われ方は、*Bruxelles* の《Banc vert où chante au paradis d'orage, / Sur la guitare, la blanche Irlandaise》や、*Illuminations* の《Le paradis des orages s'effondre》(Villes), *Saison* の《Je nous voyais comme deux bons enfants, libres de se promener dans le Paradis de tristesse》(Délires I) など。《grimace》については、*Bal des Pendus* の《Ses petits pantins noirs grimaçant sur le ciel》があるが、実は後述の如く、この *Bal des Pendus* が *Parade* の原型をなしている。そして、

その本当の意味は、「ダンス」の「身振り」である。それは苦痛の極みの、「陶醉」の「ダンス」であった (*Mauvais sang* 参照)。

—Il y a quelques jeunes, —comment regarderaient-ils Chérubin?—
pourvus de voix effrayantes et de quelques ressources dangereuses.

—数人ノ若者ガイルガ、「天使けるびむ」ヲ如何ニ眺メルデアロウカ。
彼等ハ恐ロシイ声ヲシ、何カ危険ナ能力ヲ持ツ。

この《jeunes》は、以上からして必然的に、修業中の《voyant》達を指す。*Les Sœurs de charité* には《Le jeune homme》が二回現われ、*Les Déserts de l'amour* の冒頭も、《Ces écritures-ci, sont d'un jeune, tout jeune homme》であり、共に自身を表すものであった。そして、彼等の反対が、《charmant enfant》(*Petit Larousse*) の《Chérubin》であるから、その意は明らかであろう。「天使」を別の「天使」が眺める図である(《moi, qui me suis dit mage ou ange》, *Adieu*)。なお *Saison* に、《N'eus-je pas une fois une jeunesse aimable, héroïque, fabuleuse, à écrire sur des feuilles d'or》(*Matin*) の言がある。次の《voix》は稿を改めるべき重要なランボオ語であるが、*Solde* の《A vendre les Corps, les voix》と、*Age d'or* の《Quelqu'une des voix / Toujours angélique》を挙げておこう。そして、これを解く鍵となる《La voix de cent corbeaux l'accompagne, vraie / Et bonne voix d'anges》(*La Rivière de Cassis*) も。従って、この《voix》も、先の「鳥」の《enrouements》と係わると思わねばならない。《effrayantes》は、先程の《sa gaité effrayante pour la foule》があった。また《ressources》は、《leurs brillantes facultés》の可能性である。そして、《dangereuses》については、《Je reconnaissais, — sans craindre pour lui, — qu'il pouvait être un sérieux danger dans la société》(*Délires I*) と。

On les envoie prendre du dos en ville, affublés d'un *luxé* dégoutant.

彼等ハ背中ヲ襲イニ町ヘ遣ラレル。唾棄スベキ華美ヲ異様ニ纏ッテ。

次の《folâtres》は、《qui aime à faire gaiement de petites folies》(*Petit Littré*)の意。ランボオの《folies》は、《L'histoire d'une de mes folies》(*Délires II*)を指摘するまでもなく、今改めて言及するには及ぶまい(「*Le Bateau ivre, ou la clairvoyance et la folie de Rimbaud*」参照)。だが、「陽気」については、次の例を挙げよう。《Attirez le gai venin / Des lise-ron》(*Fêtes de la faim*), 《et sa gaiété effrayante pour la foule》(*Solde*), 《il n'accomplira pas la rédemption des colères de femmes et des gaietés des hommes》(*Génie*)など。また、先に《Je ne regrette pas ma vieille part de gaiété divine》を引用した。従って、これも典型的なランボオ語であることが分る。そして《enrouements》は、《altération particulière de la voix et de la toux, qui les rend sourdes et voilées》(*P. L.*)であるから、これは正にランボオの作品そのものである。なお略述に止めるが、これは「烏」(言うまでもなく《noir》である)の声と係わり、例えば *Saison* 冒頭の、《Or, tout dernièrement m'étant trouvé sur le point de faire le dernier *couac*!》となる。長くなったが、以上の全体が《Quels hommes mûrs!》に係るのである。

La démarche cruelle des oripeaux!

襤褸服共ノ，甚エ難キ身振りヨ。

《oripeaux》は、《haillons》の意であり、やはり例の *Forgeron* に《Tas sombre de haillons saignant de bonnets rouges》とある外、*Mort de Quatre-vingt-douze* でも《Vous dont les cœurs sautaient d'amour sous les haillons》と言う。どちらも「貧しき人々」である。そして自身についても、《sobre surnaturellement, plus désintéressé que le meilleur des mendiants》(*L'Impossible* 冒頭の回想部分)と。それはレオン・ザックの画像に見る如く、彼自身が繰り返し語った余りにも有名なランボオ像である。これが *Saison* の最後では、《Ah! les haillons pourris》(*Adieu*)となったのであった。なお《oripeaux》は、《Tout étoffe, toute broderie de faux or ou de faux argent》(*P. L.*)である為に、題との関係で使われたが、更には、彼一流の表現が容易に見てとれよう。次の《démarche》は、*Solde* の《Les richesses jaillissant à chaque démarche!》が同じ意味を表す。ここでは《cruelle》が示す如く、世間から見たランボオ自身の様であるが、

上において便宜上「ランボオ色彩学」と呼んだものであり、*Illuminations* の *Guerre* では、これを単に「光学」とも言う（《Enfant, certains ciels ont affiné mon optique》）。さて、最後の《d'acier piqué d'étoiles d'or》は特に奇怪な形容であるが、《d'acier》は、《dans les herbages d'acier et d'émeraude》(*Mystique*) や、《Les proues d'acier et d'argent》(*Marine*) などの例がある。多くの宝石や貴金属と同様、「錬金術師」ランボオが硬度の高いものに示した嗜好と言えよう。そして、《piqué d'étoiles d'or》は、先に触れた *Roman* に、殆ど同じ形の《Voilà qu'on aperçoit un tout petit chiffon / D'azur sombre, encadré d'une petite branche, / Piqué d'une mauvaise étoile》があったのである。《or》は既に説明した。従って、《d'acier piqué d'étoiles d'or》もまた、《voyant》の眼を表すものであった。次は《des facies》にかかる形容詞について。この《facies déformés》も、以上からして、《voyant》が受けねばならぬ《Ineffable torture où il a besoin de toute la foi, de toute la force surhumaine》によって「歪んだ顔貌」を指し、それは言葉を変えて言えば、《il s'agit de faire l'âme monstrueuse: à l'instar des comprachicos, quoi! Imaginez un homme s'implantant et se cultivant des verrues sur le visage》(*Lettre du voyant*) の結果なのであった。これが *Saison* の、《Ah! remonter à la vie! Jeter les yeux sur nos difformités》(*Nuit de l'enfer*) である。そして次に、その責苦の様を「色」で表したのであった。先ず《plombés》は、同義の《livides》の例がある。《tu sens / Sourdre le flux des vers livides en tes veines》(*L'Orgie parisienne*), 《je suis soûl, fou, livide》(*L'Homme juste*) など。これが次第に《blémis》, 《incendiés》と、その度を強めて行く。《blémis》(又は《blêmes》)の例は、《flottaison blême / Et ravie》(*Le Bateau ivre*), 《dans ce brouillard triste et blémi》(*Entends comme brame*), 《un petit monde blémi et plat》(*Soir historique*), 《blêmes figures》(*Nocturne vulgaire*) など。《incendiés》は、《Voyez comme le feu se relève! Je brûle comme il faut》や、《C'est le feu qui se relève avec son damné》(共に *Nuit de l'enfer*) などからして、地獄の業火に「焼かれた」の意になろう。以上、そのいずれもが《voyant》の受けた《Ineffable torture》を表すが、彼の言葉では、それは「陶醉」であり、「激怒」なのである。また、この部分は「音」の面で、《des facies》が《déformés》を導き、《déformés》が《plombés》となり、《plombés》から《blémis》, そこから《incendiés》へと繋がっていく。

nuits estivales; / Qui se retournent sur des lits de diamants》 (*Les Sœurs de charité*) の例があり、この《lits de diamants》も、ここと同じく、前述の「夜空の星」を指しているのである。さて、問題は《rouges et noirs》であるが、この例は既に見た筈であり、《noirs》は説明済みとする。また《rouges》も、「怒り」と「陶醉」に血走った眼であるから (*Voyelles* 参照)、これも問題とはならない。問題は何故《rouges》と《noirs》が結びつくかである。即ち《La boue est rouge ou noir》や、《la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire》 (*Mauvais sang*) などは、一体何を表すものであろうか。それは、彼がこの觀念に「取り付かれている」だけでは納得し難いことである。そこで考えてみると、先ず共通する《boue》であるが、これは道である。すると、ランボオが「大歩行者」であることが思い出された。《Je suis le piéton de la grand'route par les bois nains》 (*Enfance*)。同時に、「夕陽」に見入る彼の姿が目には浮んだ。《Le petit frère (il est aux Indes!) là, devant le couchant, sur le pré d'œuillets》。また、《Je vois longtemps la mélancolique lessive d'or du couchant》 (共に *Enfance*)。この時、突然道が《rouge》に見え、また、それは《noir》でもあった。正にこの瞬間、例の放電現象が起り、引用した *Mauvais sang* の続きの部分が、一挙に照し出されたのである。《Bonne chance, criais-je, et je voyais une mer de flammes et de fumée au ciel; et, à gauche, à droite, toutes les richesses flambant comme un milliard de tonnerres》。この詩人の語り口とは、常にかくの如きものなのである。用心の上にも用心をしなければならない。*Enfance* 同様、ここも自分の「少年時代」を語った僅かなうちの一部をなしているが、先の《aux cieux d'or》や、《mélancolique lessive d'or》からして、この「夕陽」と《or》との関連はもはや明らかであろう（「夕陽」については、先の「Soleil couchant 論」参照）。従って、《Des yeux rouges et noires》は、本当はこれを映した眼であったのである。そして、次の《tricolores》も、最初は「青白赤」と見て十分解釈出来ると思われたが、今の《rouges et noirs》の例を見た以上は、そこにはやはり何かあると考えねばならない。そこで気が付いたのが、《De tes noirs Poèmes, —Jongleur! / Blancs, verts, et rouges dioptriques》である。正にこれであった。この《dioptriques》は、その頃に作られた *Voyelles* の理論を指している。では、何故《Blancs, verts, et rouges》であるのか。それは、《noir》（アルファ）が世界の初まりであり、《bleu》（オメガ）が世界の終りである為であった（「*Voyelles* 論」参照）。なお、ここの「屈折光学」が、以

de tous les caractères parmi les apparences》(Veillées II), 《tous les caractères nuancèrent ma physionomie》(Guerre)などと、Saisonの《J'ai créé toutes les fêtes, tous les triomphes, tous les drames》(Adieu)を見るならば、もはや十分に領けるであろう。同時に、「複数」であることの理由も。次に、前半の《Sans besoins, et peu pressés de mettre en œuvre》は、《Je ne regrette pas ma vieille part de gaieté divine: l'air sobre de cette aigre campagne alimente fort activement mon atrance scepticisme》(Vies II)のことであるが、続けてこの《scepticisme》をも否定し、《Mais comme ce scepticisme ne peut être mis en œuvre》と、正に同じ表現を用いているのである。故に、それは二重の意味で《Sans besoins》なのであった。ここから、次の《Quels hommes mûrs!》へと繋がっていく。

Quels hommes mûrs ! Des yeux hébétés à la façon de la nuit d'été, rouges et noirs, tricolores, d'acier piqué d'étoiles d'or; des faces déformés, plombés, blémis, incendiés; des enrouements folâtres !

何ト成熟シタ男共カ。ソノ眼ハ夏ノ夜ノ如ク朦朧トシテ、赤ト黒、白緑赤ノ三色、金色ノ星ガ突キ刺サッタ鋼色。顔貌ハ歪ミ、鉛色デ、青ザメ、業火ニ焼ケタ色。ソノ巫山戯タ嗔声。

これは一見したところ、誠に奇怪な表現と見なされようが、先の「ランボオ色彩学」に基づいて見るならば、その様相は一変する。そのための前置きであった。ただし、ここを理解するには、その奥義に通ぜねばならない。先ず《hébétés》であるが、例の *Le Forgeron* そのものに、《Hébétés comme des yeux de vache, / Nos yeux ne pleuraient plus》とあるのは、先の指摘からすれば不思議ではないであろう。これは《Forgeron》が、自分達を語った個所である。そして、この《Des yeux hébétés》も、*Forgeron*と同様に、「苦痛」とその極みの「怒り」と「陶醉」によって「朦朧となった眼」を表している。これについては、以下に繰り返し語られることになるが、この「苦痛と一体の怒りと陶醉」こそは、ランボオの常住の状態なのであった。次の《nuit d'été》は、《Par les soirs bleus d'été, j'irai dans les sentiers (Sensation) や、《Nuit de juin ! Dix-sept ans ! — On se laisse griser》(Roman) に基き、やはり「陶醉」を表すが、この二つの作品は後述の如く、他の点からも *Parade* と結びつく。また、《Pareil aux jeunes mers, pleurs de

が、この「開拓」と同義であり、勿論これは「精神的な」《exploitations》を指している。そして《mondes》は、次の《consciences》が示す如く、「意識の世界」のことである。なお《monde》は重要なランボオ語故に、その数も多いが、*Illuminations* の《Ce ne peut être que la fin du monde, en avançant》(*Enfance*) や、《Quand le monde sera réduit en un seul bois noir》、《les feux à la pluie du vent de diamants jetée par le cœur terrestre éternellement carbonisé pour nous. — O monde !—》(*Barbare*), 或は *Saison* の《aux confins du monde》(*Délires II*) などの指摘に止める。そのいずれもが、同じ「世界の果て」への指向を示していることが分るであろう。

Sans besoins, et peu pressés de mettre en œuvre leurs brillantes facultés et leur expérience de vos consciences.

ソレハ己ノ輝カシキ才能ト、己ガ為シタ貴方ガタノ意識ノ体験トヲ、実地ニ用イル必要ハ感ゼズ、復ソレヲ凡ソ急ガヌ族。

ここに至ると、やはり *Lettre du voyant* に触れねばならない。即ち、《Le poète se fait *voyant* par un long, immense et raisonné *dérèglement* de *tous les sens*》であること。そして、《Toutes les formes d'amour, de souffrance, de folie》が探求されること。そのためには、《toute la force surhumaine》が必要なこと。その結果、《Qu'il crève dans son bondissement par les choses inouïes et innommables: viendront d'autres horribles travailleurs; ils commenceront par les horizons où l'autre s'est affaissé!》が予想されること。従って《Des drôles》は、この《travailleurs》を指す筈である。では、具体的に見てみよう。先ず《facultés》については、*Illuminations* の《élan de nos facultés》(*Génie*) があり、*Saison* の《J'ai tous les talents!》(*Nuit de l'enfer*) や、《J'ai cru acquérir des pouvoirs surnaturels》(*Adieu*) も同義である。それ故、《leurs brillantes facultés》は、当然この《voyant》達が持つ「能力」となる。その《travailleurs》としての、《leur expérience de vos consciences》である。この点に関しては、同じ *Illuminations* の《Exilé ici, j'ai eu une scène où jouer les chefs-d'œuvre dramatiques de toutes les littératures》(*Vies I*) や、《Rêve intense et rapide de groupes sentimentaux avec des êtres

甚ダ遅シキ、オカシナ者共。

この《Des drôles》が、やはり「ランボオ・レキシコン」の一つであることは想像に難くないが、念の為に最初から調べてみよう。すると、何と「初期韻文詩」七作目の *Le Forgeron* の中に、正に *Parade* の注釈とも言うべきものが見つかったのであった。即ち、《Or le bon roi, debout sur son ventre, était pâle, / Pâle comme un vaincu qu'on prend pour le gibet, / Et, soumis comme un chien, jamais ne regimbait, / Car ce maraud de forge aux énormes épaules / Lui disait de vieux mots et des choses si drôles, / Que cela l'empoignait au front, comme cela!》である。Rimbaud Forgeron は、ルイ十六世を《le bon roi》と言い、自らを《ce maraud》（《drôle》と同義）と呼んで、その語る革命思想を《des choses si drôles》と称しているのである。そして、次の《très solides》も、この引用部分の《aux énormes épaules》と直接結びつく。更にその冒頭部分の、《Le bras sur un marteau gigantesque, effrayant / D'ivresse et de grandeur, le front vaste, riant / Comme un clairon d'airain, avec toute sa bouche, / Et prenant ce gros-là dans son regard farouche, / Le Forgeron parlait à Louis-Seize》を見るならば、もはや *Parade* 全体と重なり合うことは否めないであろう。この《Forgeron》がランボオ自身であることを否定する者は、恐らく一人もいまい。故に、《Des drôles》もランボオである。問題は複数であることだが、これは後に残す。なお同じ形容詞で、*Illuminations* の《Mais la Vampire qui nous rend gentils commande que nous nous amusions avec ce qu'elle nous laisse, ou qu'autrement nous soyons plus drôles》（*Angoisse*）や、*Saison* の《Comme ça te paraîtra drôle, quand je n'y serai plus, ce par quoi tu a passé》、《Drôle de ménage!》（共に *Délires I*）などの例があるが、すべて同じ意味を持つ。

Plusieurs ont exploité vos mondes.

何人カノ者ハ、アナタ方ノ世界ヲ開拓シタ。

ここは、*Illuminations* の *Démocratie* を見る必要がある。その中の《au service des plus monstrueuses exploitations industrielles ou militaires》

夕焼けの空)。そして、*Bateau ivre* の《Est-ce en ces nuits sans fonds que tu dors et t'exiles, / Million d'oiseaux d'or, ô future Vigueur?》。また、《Alchimie du verbe》も、勿論この《or》を取り出すためのものであった。しかしながら、その《Alchimie》も、やはり《la noire alchimie》であり、《l'inconnu》もまた、《noirs inconnus》であったのである。一方、彼の使命は、文字通り「絶対」であった。如何にすべきか。彼はその時、自身が闇を貫く「光芒」となったのであった。これが即ち、《j'écartai du ciel l'azur, qui est du noir》に続く《je vécus, étincelle d'or de la lumière nature》(*Délires II*)である。彼はついに、自分が「金色の星」となって「闇」を照したのであった。これが《Illuminations》の本当の意味である。そして、この「流星」が燃え尽きる寸前に、ひと際大きな光芒を放ったのが *Saison en enfer* であった。後になるほど《noir》が少なくなった理由は、正にここにある。そして、*Saison* の各篇の題が示す如く、《Nuit de l'enfer》の後、ようやく《L'Eclair》となり、やがて《Matin》を迎えた彼は、己の過去を《Une Saison en enfer》として認識出来たのであった。では、ランボオは何故、後半生を熱帯で送ったのか。その作品や手紙から、夏の暑さが特に苦痛であったことが知られる。彼は「帰る」為に、自ら求めて「煉獄」に入ったのである。《loin des gens qui meurent sur les saisons》(*Adieu*)。

4. *Parade* 解釈

では、以上を前置きとして、*Parade* の解釈に移るが、先ず最初に、この題名について一言。この《Parade》の使用例を見ると、*A la musique* に、《—L'orchestre militaire, au milieu du jardin, / Balance ses schakos dans la Valse des fifres: / —Autour, aux premiers rangs, parade le gandin》があり、また *Les Pauvres à l'église* では、《Leurs seins crasseux dehors, ces mangeuses de soupe, / Une prière aux yeux et ne priant jamais, Regardent parader malheureusement un groupe / De gamines avec leurs chapeaux déformés》とある。ここの《Parade》も同じと見てよいが、それは以下に見る如く、自身を語った韜晦の表現であったのである。これと同じ意味合いを持つ題名が、*Matinée d'ivresse* であり、*Solde* である。では、本文に入る。

Des drôles très solides.

る。この *Prologue* は、彼が父親を語った唯一の作品である (*Un Cœur sous une soutane* の《un habitué à ton feu père》を除く)。しかも、夢の形で。これを文字通りに受けとれば、正に《nègre》であろう。しかしながら、稀に見た父親の、日焼けした軍人の印象に基づくと見て間違いあるまい。そして、後の *Saison* において、《Je suis bête, un nègre》と自身を語っているのである。この書が、始めは *Livre nègre* であったことは既に述べた。彼言う所の《nègre》は、故に単なる観念ではなかったのである。更には、「イリュミナシヨンの世界」を表す《l'Orient》も、恐らくはここに起因する。

以上に見た如く、この詩人の本質を現したと思われる《noir》であるが、ここで今一度、何故かが問われねばならない。

3. 「輝く光芒」

そもそも《noir》は、如何にして認識されるかと言え、要するにそれは、「光」との対比によってのみ可能なことなのである。そこからして、当初数多くの《noir》を認識したランボオは、彼自身が光の中にあつたと言えよう。しかしながら、何故かくも執拗に《noir》を見たのであろうか。それを明らかにするのが先の *Prologue* の冒頭部分であり、ランボオは、本当は《noir》を極度に嫌ったのである。その本源の理由は、「大洪水」に対する恐れ、更には「天」への郷愁であつたろう。しかしながら、それはこの世の「暗黒」すべてに対する、異常なまでの嗅覚となつたのであつた。これが、彼を「闇の狩人」と名付けた所以である。ここにおいて、《La chambre est pleine d'ombre》は、最終的に理解されたことになる。そして、彼は自身が人類の先頭に立ち、この「闇」を貫いて彼方へ達することを、詩人としての絶対の使命と感じたのであつた。その宣言書が *Lettre du voyant* である。以後キリストと真向から対決した彼は、己を誠の《ange》（「使者」）と目して、「偽りの光」から「真の闇」へと敢然と入って行く。これが即ち、《j'écartai du ciel l'azur, qui est du noir》である。

己の達すべきその名付けようもない状態を、彼は《l'inconnu》と呼んだ。そして、その道しるべを夜空に輝く《étoiles d'or》に見たのである。従つて、この《or》は重要な意味を持ち、また事実かなりの使用例があるが、その必要なものだけを見てみよう。先ず *Ophélie* の《Un chant mystérieux tombe des astres d'or》。既に一部引用したが、*Les Premières Communions* の《La Nuit vient, noir pirate aux cieux d'or débarquant》（ここは、

はただの一度も現われない。そして、*Les Déserts de l'amour* は、《en un coin noir》の一個所だけであるが、この詩人の特徴が色濃く現われた作品であり、最初の部分がかかれただけで終って、題名に応しいものとはならなかった点に注目すべきである。その他、《*Proses évangéliques*》と呼ばれるものに、《*L'eau était toujours noire*》の例がある。

今度は「後期詩篇」を見てみる。*Larme* の《*Ce furent des pays noirs*》。*Fêtes de la faim* の《*c'est les bouts d'air noir*》。*Qu'est-ce pour nous, mon cœur* の《*Noirs inconnus*》。*Michel et Christine* の《*Chien noir*》、《*leurs fronts aux cieux noirs*》。*Mémoire* の《*meut ses bras noirs*》、《*Elle, toute / froide, et noire*》。以上、十六篇中五篇に七つある。

さて、いよいよ *Illuminations* であるが、*Après le déluge* は《*draps noirs et orgues*》。*Enfance* は冒頭の《*Cette idole, yeux noirs*》、その他《*superbes noires dans la mousse vert-de-gris*》、《*La boue est rouge ou noire*》。*Parade* は既に挙げた。*Being beauteous* は《*des blessures écarlates et noires*》。*Phrases* 冒頭の《*Quand le monde sera réduit en un seul bois noir*》、その他《*une poudre noire pleut doucement sur ma veillée*》。*Ornières* は《*au trot des grandes juments bleues et noires*》。*Veillées III* の《*La plaque du foyer noir*》。*Fleurs* では動詞の形で、《*les disques de cristal qui noircissent comme du bronze au soleil*》。*Métropolitain* は《*la plus sinistre fumée noire*》、《*les drapeaux noirs*》。*Scènes* は《*gaze noire*》。以上、四十二篇中十篇の十四例である。「初期詩集」に較べてかなり少ない。

最後に *Saison en enfer* である。*Mauvais sang* の《*la boue m'apparaissait soudainement rouge et noire*》。*Délires I* の《*Il relevait les ivrognes dans les rues noires*》。*Délires II* の《*A noir*》と《*j'écartai du ciel l'azur, qui est du noir*》。以上である。これは何としたことであろうか。《*noir*》によって埋めつくされと思われた *Saison* が、わずか四つとは。しかも、そのいずれもが回想部分に限られているのである。しかしながら、更に考えてみなければならぬ。*Saison* は、当初 *Livre païen* ないし *Livre nègre* の題が予定された。言うまでもなく、《*nègre*》は《*noir*》である。その意味では《*enfer*》こそは、最も《*noir*》であると言わねばならない。

ところで、先に触れた *Prologue* の中に、《*mon père était officier dans les armées du roi. C'était un homme grand, maigre, chevelure noire, barbe, yeux, peau de même couleur*》と、誠に不可解な表現が見い出され

に起因することを知ったのであった（最初の論「Le Sonnet des Voyelles」参照。これと、同じ創世紀の「大洪水」の闇が二重に重なっている）。ランボオが *Saison* の中で、《Je ne me souviens pas plus loin que cette terre-ci et le christianisme》と語っているのは、正にこの意味なのである。故に《A》（アルファ）は、《noir》であった。*Les Etrennes* 冒頭の《La chambre est pleine d'ombre》は、ここに至って初めて明らかになる。更には、九才頃の作とされるが、信じ難いまでにランボオ的な *Prologue* の、その不思議な冒頭部分も、この観点に立って初めて領けてくるのである。少し長いが極めて重要な一文であるために、ここに挙げることにする。《Le soleil était encore chaud; cependant il n'éclairait presque plus la terre; comme un flambeau placé devant les voûtes gigantesques ne les éclaire plus que par une faible lueur, ainsi le soleil, flambeau terrestre, s'éteignait en laissant échapper de son corps de feu une dernière et faible lueur, laissant encore cependant voir les feuilles vertes des arbres, les petites fleurs qui se flétrissaient, et le sommet gigantesque des pins, des peupliers et des chênes séculaires. Le vent rafraîchissant, c'est-à-dire une brise fraîche, agitait les feuilles des arbres avec un bruissement à peu près semblable à celui que faisait le bruit des eaux argentées du ruisseau qui coulait à mes pieds. Les fougères courbaient leur front vert devant le vent. Je m'endormis, non sans m'être abreuvé de l'eau du ruisseau.》これが、文字通りランボオの原形である（「Rimbaud et le soleil couchant」参照）。そこには、地上に降りた「使者」の幼き姿が、見える人には見えるであろう。それは如何にも唐突な物言いではあるが。

次に散文の例を見てみよう。先ず、*Charles d'Orléans à Louis XI* は、《tous ces pauvres enfants secs et noirs comme escouvillons》、《ces terribles oiseaux noirs que suivent corbeaux et pies!》、《noir et flou comme chevauteur d'escovettes》、《le regret des vieilles ruelles noires》の四個所である。そのうち初めの二つはヴィヨンを下敷きにしたが、ヴィヨンからこの個所を取り出したのはランボオである。次に *Un Cœur sous une soutane* では、《La cuisinière noire》、《mes habits noirs》、《mes souliers à cordons noirs》、《une énorme pendule en bois noir》、《mon chapeau noir》、《deux dents noires》、《Les basques de mon habit noir》の七つであり、更に題の《soutane》そのものが「黒い」。 *Lettre du baron de Petdechèvre* は、省略した方がよいと思われる。また事実、《noir》

篇中の二十七篇に、六十一回現われる（その他《mi-noir》と、《noirceur》が一例ずつ見られた）。しかも、そのうち六篇は冒頭から《noir》である（*Les Etrennes* の《ombre》と、*Le Buffet* の《sombre》を入れると八篇）。これが異常でなくして、何であろうか。更にその上、同義の《ombre》や、《nuit》、《sombre》は勿論のこと、これと結びつく感覚ないし感情を伴った語が頻繁に用いられ、全体としては厖大な数に上るであろう。そして、その全体から《noir》の意味を捉えねばならないのである。しかしながら、上記の引用例ばかりでなく、その前後を読み、更にその作品全体を見て、再びその個所を見直し、その上で他の作品の例と較べるならば、そのどんな難解な表現も、或る点までは必ず理解出来る筈である。その時には、例えば《l'œil noir》は単に眼の色が黒いことを表しているのではないこと、《bonnet noir》は帽子が黒いだけではないことが分るであろう。この詩人は、そもそもの最初から、その様な単純な表現はしていないのである。とは言え、その出発点は辞書の意味に求めねばならない。何故ならば、彼は決して共通の言語からは外れずに、驚嘆すべき的確さでもって語っているからである。《Donc le poète est vraiment voleur de feu. / Il est chargé de l'humanité, des animaux même》（*Lettre du voyant*）と自負したランボオにしてみれば、それは当然のことであったと言えよう。勿論、麻葉の幻覚などとは凡そ異なるものだったのである。従って、他の色についても以上のことがなされるならば、そこから自と「ランボオ色彩学」が形作られていく筈である。これが詩人ランボオを本当に理解する為の入口となる。

なお、その他の色が冒頭に現われるのは、*Sensation*（《bleus》）、*Vénus anadyomène*（《vert》、《blanc》）、*Le Mal*（《rouges》）、*Rage de Césars*（《pâle》）、*Rêvé pour l'hiver*（《rose》）、*Le Dormeur du val*（《verdure》）、*La Maline*（《brune》）、*Tête de faune*（《vert》、《d'or》）、*Les Sœurs de charité*（《brune》）、*Voyelles*（《blanc》、《rouge》、《vert》、《bleu》）、*L'Etoile a pleuré*（《rose》）、*Les Chercheuses de poux*（《rouges》）の十二篇であり、それはやはり驚くべき数である。しかし *Voyelles* の色は、いずれも《noir》の後にある。また *Le Dormeur du val* も、この《Dormeur》は「死者」であるから、最初に《noir》があると見なければならぬ。従って、本当の冒頭は、《noir》が圧倒的に多いのである。それは、ランボオの駆使する多彩な色彩群の中であって、最初は目立たぬ存在であるが、ひと度これに気付くならば、正に「黒い太陽」の如くに輝き始める。そして、その根源の意味を追求した結果、それは実に、創世紀の「太初の闇」

二十六詩節1行目, 《Noire, rogue au bord de sa chaise》。第二十八詩節3行目, 《Noirs et frais》。 *Les Effarés* の冒頭, 《Noirs dans la neige et dans la brume》。 *Le Mal* の第四詩節2行目, 《et pleurant sous leur vieux bonnet noir》。 *Rages de Césars* の2行目, 《en habit noir》。 *Rêvé pour l'hiver* の第二詩節4行目, 《De démons noirs et de loups noirs》。 *L'Eclatante victoire de Sarrebruck* の第四詩節1行目, 《comme un soleil noir》。 *Le Buffet* の最後の行, 《tes grandes portes noires》。 *Les Corbeaux* の第三詩節6行目, 《O notre funèbre oiseau noir!》。 *Les Assis* の冒頭, 《Noirs de loupes》。第二詩節2行目から, 《aux grandes squelettes noires / De leurs chaises》。第八詩節2行目, 《ce venin noir》。 *Mes petites amoureuses* の第五詩節2行目, 《Noir laideron》。 *Accroupissements* の第五詩節4行目, 《Aux coins noirs》。 *Les Poètes de sept ans* の第二詩節2行目, 《pourtant des tics noirs》。同20行目, 《de maigres doigts jaunes et noirs de boue》。第五節1行目, 《Noirs, en blouse》。 *Les Pauvres à l'église* の第三詩節2行目, 《Après les six jours noirs》。 *Les Mains de Jeanne-Marie* の第四詩節3行目, 《C'est le sang noir des belladones》。 *Les Sœurs de charité* の第二詩節1行目から, 《Impétueux avec des douceurs virginales / Et noires》。第四詩節3行目, 《Ni regard noir》。第九詩節1行目, 《la noire alchimie》。そして, かの *Voyelles* 冒頭の, 《A noir》。同3行目, 《noir corset》。 *L'Etoile a pleuré rose* の4行目, 《Et l'Homme saigné noir》。 *Ce qu'on dit au poète à propos de fleurs* の冒頭, 《vers l'azur noir》。同I第六詩節4行目, 《Crachats sucrés des Nymphes noires!》。IVの2行目, 《Noirs d'épouvantables révoltes》。同第十詩節の1行目, 《au cœur des noirs filons》。Vの第四詩節1行目, 《De tes noirs Poèmes》。 *Les Premières communions* の第一詩節4行目, 《Un noir grotesque》。第二詩節6行目, 《mûriers noirs》。第五詩節1行目, 《Le premier habit noir》。第七詩節6行目, 《noir pirate aux cieus d'or débarquant》。同Vの第四詩節4行目, 《les spectres noirs des toits》。同VIの第二詩節4行目, 《l'ombre des murs bondés de noirs sommeils》。 *Les Chercheuses de poux* の第四詩節1行目, 《Il entend leurs cils noirs battant》。 *Le Bateau ivre* の第十四詩節4行目, 《avec de noirs parfums》。第二十詩節2行目, 《hippocampes noirs》。第二十四詩節1行目から, 《C'est la flache / Noire et froide》。以上の如く, ざっと見て 《noir》だけでも, 「初期韻文詩」四十四

2. 「闇の狩人」

この短い *Parade* 一編を見ても、そこには《rouges》(二回)、《noirs》、《tricolores》、《d'acier》、《d'or》、《plombés》、《blémis》、《incendiés》と、色を表す言葉が九つもある。実際は《noir》と同義の《nuit》や、《rouge》である《sang》、更には《brillantes》、《étoiles》、《flambent》、《ruissent》等も含めて考えねばならぬが、それ等を除外しても、この数は尋常ではない。結論から言えば、そこには厳とした「ランボオ色彩学」が存在したのである。しかし、ここでその全体を述べることは出来ないの、最も重要な《noir》だけを取り上げて、何故この詩人が「闇の狩人」であるのかを説明しよう。実に、この《noir》を知るこそこそが、ランボオ理解の要をなすのである。そこから、何故《Illuminations》であり、何故《Saison en enfer》であるのかが、自と明らかになるであろう。

以下に、作品に現われるその使用例を見ていくが、これがかんりの数に及ぶために、個々の注釈は省いて列挙に止めねばならない。とは言え、これらの例は、もし注意深く見るならば実に多くのことを語る筈である。先ず、先に触れた *Les Etrennes* であるが、この《ombre》は《noir》と同義である。しかしながら、論を分りやすくするために、同義のものは省いて、ただ《noir》だけを見ることとする。従って、同IVの8行目、《sa porte brune et noire》。同Vの25行目、《Ce sont des médaillons argentés, noirs et blancs》。同じく27行目、《Des petits cadres noirs》。 *Soleil et chair I* の最後から2行目、《Déesse aux grands yeux noirs vainqueurs》。同IVの11行目、《Sur son char d'or brodé de noirs raisins》。同29行目、《Et son ventre neigeux brodé de mousse noire》。 *Ophélie* の冒頭、《Sur l'onde calme et noire》。同6行目、《sur le long fleuve noir》。 *Bal des Pendus* 冒頭のリフレイン、《Au gibet noir》。第一詩節2行目、《Ses petits pantins noirs》。第二詩節2行目、《Comme des orgues noirs》。第六詩節2行目、《Le gibet noir》。そして、最後のリフレイン。 *Le Châtiment de Tartufe* の2行目、《Sa chaste robe noire》。第二詩節4行目に、同じく《Sa chaste robe noire》。 *Le Forgeron* の第二詩節10行目、《dans cette terre noire》。第五詩節18行目、《devant les donjons noirs》。第六詩節6行目、《Et je vais dans Paris, noir》。同10行目、《Avec tes hommes noirs》。 *Les Reparties de Nina* の第四詩節4行目、《Ton grand œil noir》。第

解釈を完全に排すること。例えば、かの有名な「ラコスト説」などはその最たるものであるが、これについては後述する。その二、作品のみをひたすら考え、考えて考え抜くこと。その極に達し、なお不明のまま時間が経過する時、突如として放電現象が起る。インスピレーションのことであるが、正しく閃光がひらめき、難解な一点が一挙に解明される。そして、これを繰り返しながら、あたかも連鎖反応の如く、徐々に全体が明らかになっていくのである。これまで、すべてこのようにして解いてきたが、その次第に全体が見えてくる様は、正に驚きの連続であった。ただ、この方法は神経の極度の集中を要するために、かなりの時間を置かねばならない。それは、絶壁を素手でよじ登るにも等しいことなのである。

ところで、多くの「大人」達は、この詩人の才を認めるには吝かでないにせよ、相手が「子供」と見て、内心侮ったに違いない。かの H. Mondor も、そのために完全に失敗したと言えよう。彼言う所の《impatient》が、使命感に基づいた想像を絶する《patience》と、正に表裏一体をなすことを見なかったのである。*Fête de la patience* を、外に何と解釈出来ようか。又、その反社会的な姿勢について言えば、ドストエフスキーが特にその晩年、専ら青年達を主人公として、人間の可能性の極限を追求したが、ランボオこそは、これらの「怪物」ないし「半神」にも劣らぬ、しかも生きた存在であったことを知らねばならない。そればかりか、「社会」に対する義務を、彼は人一倍強く感じていたのであった。「叛逆児」などとは、見当違いもまた甚しいであろう。

次に、或る作品を解く本当の鍵は、他の作品群にあること。しかも、*Illuminations* や *Saison* に現われた言葉の源をたどると、その殆どが初期詩集にまで溯ることが知られる。それ故、もしこの初期詩集に他の詩人からの剽窃を認めて、それで事足りりとするならば、事実は何も見えていぬことになるであろう。具体的に言えば、「初期韻文詩」の最初の作品 *Les Etrennes des Orphelins* は、《La chambre est pleine d'ombre》で始まるが、この簡単な表現を何と見るのであろうか。それは一見何の変哲もない一句であるが、これを知るには、ランボオが何よりも第一に「闇の狩人」であったことを、はっきりと認識しなければならないのである。さもなくば、*Les Etrennes* ばかりか、*Saison* や *Illuminations* は勿論のこと、他の初期詩集の理解からも程遠くに違いない。ここに科学の時代に応しく、「*Illuminations* は *Saison* の後に書かれた」のであった。では、何故かく断言出来るか、以下にその理由を示そう。

J'ai seul la clef de cette parade sauvage.

これまで、他の「説」への言及は努めて避けてきたが、この論に至っては、もはやこれを回避し得なくなった。失言は、予め御断りしておく。この詩人は過去一世紀に渡って、極度の無理解に晒されてきたのであった。一体、それは何故の発言であったのか。その余りの酷さには、何としても憤りの念を禁じ得ないのである。故に本論は、彼ランボオの名誉の為に、*Parade*を一語残らず解明し、更には世上を風靡するラコスト説の非を、「完全に」明かすであろう。

さて、この曰く付きの作品と取り組むには、かなりの慎重さを要した。問題は、どこに手掛かりを求めるかであった。その時注目したのが、かねて気掛かりの最後の一行、《J'ai seul la clef de cette parade sauvage》である。また彼は、しばしばその最後の一行に、この「鍵」を置いた。例えば、*Qu'est-ce pour nous, mon cœur* の《Ce n'est rien! j'y suis! j'y suis toujours》や、*Saison en enfer* の各篇の終り、*Illuminations* のかなりの部分など、そのいずれもが理性の戻った時の言であり、それ故にこそ、「鍵」となり得ると言えよう（前稿104頁参照）。そこで当の *Parade* については、他の解釈は勿論のこと本文さえも見ずに、この最後の一行のみを思い浮かべながら、やがて一年以上を経たが、或る時ふと、これは自分自身を語っていることに気付いたのであった。ランボオが他を殆ど語らぬことを思えば、これは遅きに失したと言わねばならないが、その内容を考えるならば、普通は人の思い付かぬことであろう。何故ならば、内容自体が奇怪であるばかりか、その主語が複数だからである。幸いにも前稿において、ランボオの自己表現が、特異な「二人の形式」を取ることを確めた。また同時に、己を語る時の、その特有な韜晦も見たのである。もはや疑問の余地はないと思われたので、はるか以前に目を通した諸説をここで見直してみたが、要するに、例のよき友 Delahaye の説や、首尾一貫した Lacoste 説は論外としても、Adam 説もやはり、これをそのままランボオの「毒舌」と受け取っていることに変わりはない。その対象が、「客寄せ」ないし「行列」か、「カトリック」の違いはあるにせよ。また Gengoux のいちぢな haschisch 説も、改めて取り上げるには及ぶまい。いずれにせよ、そのどれ一つとして、内容とは完全に相容れぬものなのである。*Parade*に限らず、ランボオは凡そ次元の異なることを語っていると思わねばならない。

以下の論を進める為には、ここで我流の解読法を述べざるを得ないであろう。しかしながら、それは最も古風な読書法でもある。その一、すべての空想的な

L'Interprétation des *Illuminations*

III

中 村 弘

1. ランボオの解説

ここで *Illuminations* の中でも、最も難解とされる一篇に出会った。その名を *Parade* と言う。全文は、以下の如くである。

Des drôles très solides. Plusieurs ont exploité vos mondes. Sans besoins, et peu pressés de mettre en œuvre leurs brillantes facultés et leur expérience de vos consciences. Quels hommes mûrs ! Des yeux hébétés à la façon de la nuit d'été, rouges et noirs, tricolores, d'acier piqué d'étoiles d'or ; des facies déformés, plombés, blémis, incendiés ; des enrouements folâtres ! La démarche cruelle des oripeaux ! — Il y a quelques jeunes, — comment regarderaient-ils Chérubin ? — pourvus de voix effrayantes et de quelques ressources dangereuses. On les envoie prendre du dos en ville, affublés d'un *lux*e dégoûtant.

O le plus violent Paradis de la grimace enragée ! Pas de comparaison avec vos Fakirs et les autres bouffonneries scéniques. Dans des costumes improvisés avec le goût du mauvais rêve ils jouent des complaintes, des tragédies de malandrins et de demi-dieux spirituels comme l'histoire ou les religions ne l'ont pas jamais été. Chinois, Hottentots, bohémiens, niais, hyènes, Molochs, vieilles démences, démons sinistres, ils mêlent les tours populaires, maternels, avec les poses et les tendresses bestiales. Ils interpréteraient des pièces nouvelles et des chansons « bonnes filles ». Maîtres jongleurs, ils transforment le lieu et les personnes et usent de la comédie magnétique. Les yeux flambent, le sang chante, les os s'élargissent, les larmes et des filets rouges ruissellent. Leur raillerie ou leur terreur dure une minute, ou des mois entiers.